

「心あわせ・力あわせ」で、 生き生きと

—中電ウイング株式会社—

職場
ルポ

WORKSHOP REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



中電ウイング株式会社

〒457-0077 愛知県名古屋南区立脇町1-13-1
TEL 052-819-0621 FAX 052-819-0705
URL <http://www.chuden-wing.co.jp/>

※『働く広場』では通常「障害」と表記いたしますが、当該記事では、
中電ウイング株式会社様の要望により「障害」を「障がい」としています。

「福祉」ではなく
「ビジネス」として

名古屋から東海道本線で4駅、笠寺駅から数分で、シンボルカラーのオレンジをあしらった「中電ウイング株式会社」の社屋が見えてくる。中部電力が2001年に設立した特例子会社で、03年に操業を始めた。

特例子会社設立のいきさつを、今年6月に専務取締役に就任した三澤弘一さんは、「1998年の法改正で、障がい者雇用率が1・6%から1・8%となりました



石田厚夫 専門役

三澤弘一 専務取締役



秋葉寛 統括部長

た。中部電力では既に法定雇用率をクリアしていましたが、一方で、知的障がい者等の雇用は進んでいませんでした。地域とともに成長している電力会社として、社会貢献、社会的責務を果たすため、知的障がいのチャレンジド、重度身体障がいのチャレンジドを雇用していこうと経営トップが判断しました」

初代の専務取締役は、中部電力の労働組合委員長を長年務めた石田厚夫さん。石田さんは愛知県障害者雇用安定審議会の委員を5年ほど経験していた。

「障がいのある方が頑張っている職場を見て感動していましたが、まさか自分がこの仕事に携わるとは夢にも思っていませんでした。いわゆる『社会的弱者』と言われる方を、どうしたら幸せにできるかと取り組んできた労働運動の仕上げ……という気持ちもあって、お引き受けしました」

着任したとき、石田さんは「福祉」ではなく「ビジネス」であることにこだわ



業務課広報担当として、会社内を案内する小島由美子さん

った。

「福祉施設と会社は違います。パブルがはじけて企業が大変な時期に、重度身体障がいや知的障がいのある皆さんを中心に会社を立ち上げるのですから心配はしました。福祉的な

発想ではなく、小さくてもきちんとした株式会社としてのビジネスモデルを作り、障がいのある方々の経済的な自立支援をしたいという思いでスタートしました」

社屋はバリアフリーに。事業は、親会社の仕事の中から、障がい者の特性を生かして長期的に続けられる仕事を検討した結果、印刷、商事、園芸の3つの事業を柱においた。



業務課のリーダーとして、経理とパソコンのシステム管理を担当する林訓央さん



吉田文華さんはデザイナー業務を担当 印刷課デザイン室、村瀬慎二さん



デザイン室の都築弘さん。DTPの愛知県代表としてアビリンピック全国大会に出場

「重度身体障がい者の皆さんには印刷の仕事に加え、付加価値の高いデザイン業務に従事していただいています。ウェブサイトの運営もしています。知的障がいのある人たちには、まず中部電力が扱っているノベルティ商品の梱包・箱詰を集約して仕事を作り、先輩企業の『かんでんエルハート』さんを参考に、きちんと教えればコツコツと丁寧な仕事を続ける特性を生かして、園芸事業を主たる仕事にしました」

38人でスタートした従業員は現在67人。うち48人（知的障がい28人、身体障がい18人、精神障がい2人）の障がいのある人たちが働く。資本金4億6千万円。2年目で累積赤字を解消して単年度黒字に。その後、黒字経営が続いている。

石田さんは、「障がい者を雇用し

なければという思いだけでスタートすると、あとが大変。特例子会社といっても株式会社ですから、長期展望を立てビジネスモデルをきちんと構築してスタートしないと、人間の頑張りだけでは事業として長続きしません」

ビジネスはクール・ヘッド 従業員とはウォーム・ハートで

特例子会社という特性上、親会社の理解があり経営は順調だった。しかし、「仕事への信頼を得るまでは大変だった」と石田さんは振り返る。

「技術も実績もない中で、障がい者の会社できちんとした仕事ができるのか？という思い込みや偏見を取り除いて、普通の会社だと認識してもらうまでに時間がかかりました。ミスした場合はずぐ報告書を出させて、原因を追究して対処法を考え、常に失敗を生かすようにしてきました。品質・価格・スピードにおいて、市場と遜色ないものを提供できなければ、特例子会社といっても応援してもらえません。今も営業担当者が飛び回っていますよ」

売上高13・5億。7割が印刷、2割が商事、1割が園芸で、中部電力グループからの受注が大半を占める。

「また、いいパートナーも構築してきました。全部の印刷が可能な設備投資は

できませんから、中部電力ではどんな印刷物が多いかを調べて、それに見合う設備投資をする。それ以外の印刷物はパートナーの会社と提携しています」

仕事の指導は現場に任せ、石田さんは働きやすい環境を整えてきた。家庭の都合や結婚後退職した人などはいいるが、仕事の厳しさを理由に辞めた人はいない。

「障がい者だからと甘えることなく、一人ひとりがきちんと仕事をしてくれたので、親会社も安心して仕事を出してくれました。ビジネスはクール・ヘッドで考える。従業員とはウォーム・ハート、親のような気持ちで接する。厳しくても、それが自分のためなのかどうかはちゃんとわかっていきますよ。個の能力よりも、チームとして助け合って仕事を成し遂げる、心あわせ・力あわせが大切だと思います」

中部電力からの出向者で、専務の三澤さんは昨年7月に取締役役に就任、今年6月に現職となった。

「それまでに障がい者との接点は特にありませんでした。前の職場でもあいさつやコミュニケーションは徹底していましたが、こちらにきて同じDNAみたいなものを感じましたが、元氣さ、エネルギーがストレートにあふれていたのは鮮烈でした。その力をどうやって生かしていくかが一番大事な仕事だと思います」



印刷工程で働く小川和昭さん（左）たちは、全員が聴覚に障害がある



今年「オフセット印刷作業」1級合格の中川貴之さん



印刷の仕上げをチェックする稲垣英樹さん

家庭、地域との心あわせも大切

社内の心あわせとともに、石田さんが

「やはり『人』だと思えます。障がい者の皆さんは、我々の行動をきちんと見えています。それに応えられないと務まりませんね」

澤さんに白羽の矢を立ててパトナタッチした石田さんは、専門役として週3回出勤している。

員と従業員とのパイプ役を担う。「非常に明るい会社というのが第一印象で、あいさつがきちんとしてきてすばらしいと新鮮に感じました。知的チャレンジの皆さんは専務や専門役を親として慕っていますので、何でも気軽に相談に来ます。私のところに相談に来る人もいます。大事だと思うのは、情報の共有化です。現場を回りながら、トップにいかにか確実に正しい情報を早く入れるかを考えています」

石田さんの補足によれば、「人数が増え、組織が大きくなってくると、どうしてもすき間風が出てくる。すき間風が出ないように、心あわせができるようにする」ことが秋葉さんの役割だそう。三

大事にしたのは、知的障がい者の家庭との関係だ。開業当初から「会社は働く場所。働けるような体調で会社に送り出すのは親の役割」と説き、数年前に本人と保護者から希望を募り、「自立を考える会」を立ち上げた。

「会社は経済的な自立支援をします。子どもの自立支援は保護者が責任をもってください。会社は会社主導ではなく皆さんが自主運営してください。必要なことは会社が協力しましょうとお話しして、福祉とは一線を画しています」

昨年までは料理教室などの親睦が中心だった会は、今年から勉強会が主となり、毎月開かれるようになった。

「親同士が親しくなって、お互いが相談し合えるようになってほしいと願っていました。親の意識が高くなって、自立をさせるにはどうしたらいいかと考えるようになりました。会社と家庭がきちんと役割分担することで、働き続けていることが大事です」

また石田さんは会社の設立にあたって、地域の人たちの理解が欠かせないと考えた。

「地域の皆様には、建物の外観・フェンスの形状・仕事の内容について、個別に訪問して話をしました。最後の説明会の席で、一番反対されていた方が『応援しよう』と言ってくれたのがうれしかったですね」

建物完成の内覧会もまず地域の人たちに、その後、中部電力の幹部が訪れた。「地域の皆様に信用のない会社がある中で信用を得るのは難しいと思います。開業後2年目から『事業場まつり』を開いて、地域の皆様に従業員と交流してもらっています。日ごろはお花を買って来ていただいていますよ」

「主役たち」は明るく元気

現場を案内していただいた。総合的な案内は、業務課広報担当の小島由美子さん。自分で工夫しながら毎日案内しているので、説明は堂に入っている。

「一人ひとりの良いところを発見して伸ばす。何か1つは自信を持たせるという指導方針を立てています。小島は詩を作るのが好きで表現力が素晴らしい。商事課で梱包をしていたのを業務課に異動して、広報担当になりました」と石田さん。

最初に業務課へ。リーダーの林訓央さんは車いすで、さっそうと業務に従事。開業時に入社して、経理業務とパソコンのシステム管理を担当する。

「まず自分の体を大切に。仕事では周りの課との関係を大事にしたいですね」印刷課長の申原石二さんは昨年出向してきた。「仕事を頑張る気持ちと、体調面とのバランスに気を使っています。皆



ウェブ対応をしている商事課のメンバー

「タオル名人」の浅井研二さん

「最初は家で、新聞紙で包装の練習をしました。たくさん商品があるときは、商品を確認して間に合うように包装するのが大変です。目標は、商事の仲間と心を1つにして頑張ることです」

園芸課では、中部電力の花壇用の花を作っている。花壇の維持管理面積は開業当初の400㎡から1200㎡に広がり、知的障がいの人たち

さん優秀で、自分の役割を理解しているので感謝しています」

印刷課主任の都築弘さんは、高校のデザイン科を卒業後、専門学校でパソコンの操作を学び就職した。吉田文華さんは事故で車いす生活になり、愛知障害者職業能力開発校でデザインを勉強して、昨年4月に入社した。印刷工程では3名の聴覚障がいの人たちが働く。それぞれ自分の役割をきっちりこなしている。

商事課は、ギフト用品、ノベルティ商品などの梱包・箱詰と、お客様への提案営業、カタログ販売、ウェブサイト「中電ウイングハートフルショップ」の運営などを行う。同サイトでは「中部の『いいもの』」として中部地域の特産品を扱っており、浜松ギョウザ、富士宮焼きそばなどが人気だそうだ。

梱包の説明は、1時間に120枚強の作業をこなす「タオル名人」で、勤続8年目の浅井研二さん。

も10名から年々増えて22名に。そのほかに精神障がいがある人2名と事務スタッフ6名がいる。年6回植え替えるので忙しい。

園芸課の全体的な説明は黒岩裕貴さん。「中部電力の花壇を年間通して維持管理することが主な仕事です」。詳しい生産方法は、寺島大貴さん、田中健次さんにバトンタッチ。草花は

発芽室、育苗室で育てていく。「農業はできるだけ使わず、害虫は手で取り除き、健康的な苗を作っています」。ダムの流木を砕いたチップとエコセメントを利用して「木玉（もくだま）」という鉢を作るのは匂坂まどかさん。直売コーナーもある。

各課の具体的な説明は入社6カ月目から始めて、だんだん幅広く案内ができるように挑戦していく。黒岩さんからみてどんな会社ですか？

「明るいい会社です。みんな生き生きとしています。僕は木玉の仕上げの技術をもう少し磨きたいと思います」

小島さんの夢は、園芸課作業室の一角で行っているDM作業を、センターとして立ち上げること。「仲間を増やせたら、うれしいです」。その日の説明は、自己採点では50点だとか。



中部電力名古屋支店内にあるビジネスアシストセンター。軽印刷担当の前山和也さん

「だから伸びるんです。読みなさいという

のではなくて、内容を簡条書きにして渡して、自分の言葉でしゃべるからお客様に伝わるんです」と石田さんは言う。

続いて、ビジネスアシストセンターも管轄する印刷課長の串原さんの案内で、名古屋市の中心、鶴舞にある中部電力名古屋支店へ向かう。手入れが行き届いた、秋の花咲く花壇がビルを取り囲む。ここでは6人が社内メール便の集配と軽印刷を行っている。急ぎの印刷がくると、休憩時間もないほど忙しいそうだ。

山口賀江さんは、信頼されるベテラン社員の1人。

「お客様に合わせる仕事ですので、忙しいときと暇なときがありますね。両股関節を手術して、誰にも必要とされていないと思っていたら、ここの募集があり



メール便の集配を行う加藤佑亮さん



名古屋支店のビルの周りの花壇



花壇の維持管理、花栽培をする園芸課。22人の知的障がい者および精神障がい者2人が活躍する

ました。自分の居場所がある、やりがいのある仕事があるので元気でいられます」
前山和也さんは入社5年目。心臓にペースメーカーを入れているが、「すごくぶる元気です。仕事は楽しいですよ」
串原さんは、「必要なときに応えてくれてありがたいと評判もいいですね。6人とも本社のイベントには参加していますので、距離感は埋まっていると思います」
社名の「ウイング」には、Work（働く）を通して、Independence（自立）し、Nice（立派）に、Growth（成長）して、大きく飛翔し

ていくという思いが込められている。
「常に明るく元気。会社へくるのが楽しみでないと、いい仕事はできない」と言う石田さん。

中電ウイングには、大勢の見学者が訪れる。「一人ひとりが一生懸命に仕事に取り組んでいる姿を多くの方に見ていただくことで、障がいのある方に対する偏見、思い込み、心のバリアをなくしてもらいたい。従業員も、自分たちの存在感を認めてもらえるのは励みになっていると思います」

障がい者雇用の仲間づくりへ

中部電力の従業員は1万7千〜1万8千名。障がい者雇用率は2・26%。本体にも300名以上の障がい者が働いている。

バトンを受け継いだ三澤さんは、「70名の従業員規模を想定して、38名から順調に成長してきました。しかし企業の体力と業務量にも限界がありますから、障がいをお持ちの方をこれ以上雇用していくのはむずかしく、次に会社としてどう取り組んでいくかを検討する段階にきています」

社の礎を築いてきた石田さんの社内評は、「明るくてパワフル」「引つ張ってくれる」「おやじ……」「温かい」。

石田さんは「一人ひとりの幸せを考え、1人の人間としてどうやって成長させてあげられるかを考えてきた」という。そして「電力会社も特例子会社が5社になったので連絡会を作りました。電力は地域とともに発展していく会社ですから、本体で障がい者を雇用するともに、本体での雇用が難しい重度身体障がい者、知的障がい者、これからは精神障がい者の皆さんを、特例子会社で雇用することが大事だと思います」

愛知県内の特例子会社5社は、今年、「ハートフルネット中部」を立ち上げた。障がい者雇用に取り組もうとする会社や、特例子会社を作ろうという企業に各社を見学してもらい、意見交換して仲間を増やしていきたいとの願いを込める。

「私たちも設立前に、いろいろな企業を見せていただいて今日があります。特例子会社がそれぞれの悩みも共有化しながら、お互いが成長していければと思います。1人でも多くの障がいのある皆さんの雇用を進めていきたいですね」

障がいのある人たちの平均年齢は29・3歳。何人かが主任に昇格している。知的障がいの人たちから、専務と専門役は「おじいちゃん」とも呼ばれるとか。厳しさの中にある、親しみと明るさ、パワフルさ。そのエネルギーが、私たちにも伝わってきた。